

19 障害をもっても地域で暮らせるまちづくりに関する研究

—ピアサポート・地域住民との関わり・地域への貢献— その2

障害福祉研究部 山根耕平 八巻知香子 河村宏

【精神障害の定義】

精神障害を定義したり説明する言葉は多々あるが、それは一言で言うと「人付き合いに困難を生じる病い」である。誰もが生きていくうえで美德とする社会規範からはずれて、特に身近な人間関係である家族や職場においてゆがみが生じて社会から孤立してしまう。

もちろん当事者はわざとそうしているわけではない。理解力や記憶力が低下したり、根気が続かなくなったり、人の話が悪口に聞こえたりしている。このような苦労のなかで、誰よりもそのような自分に落胆して不甲斐なさに絶望して、普通に暮らすことに何倍のエネルギーを費やしながらから生きている。

私の自己病名は統合失調症、“安全なクルマ作りと言ったら『ぶっ殺す』と言った元上司の声がよみがえる型”である。これは会社で安全なクルマ作りを提唱してメールマガジン等を配っていたところ職場でなぶりものにされ、以後、その恐怖の記憶が突発的によみがえるようになってしまったためである。

クルマの欠陥隠蔽に参加しようとしなかった自分を攻め立てる元上司や元同僚の映像や音声が突然よみがえっても浦河では普通に暮らしていけるのは、このような恐怖の経験を忘れていからではなく、恐怖の体験を受け止めてくれる仲間が浦河にはいるからである。これは私だけではなく安定している他のメンバーに共通していることである。つまり恐怖の体験や記憶、そして幻聴を消し去ることで安定している人は浦河にはいないのである。このようにべてるのピアネットワークの核心は、「苦労の経験を分かち合って受け止める」ことにある。

【ピアカウンセリングの要点】

ピアカウンセリングを行うときには、まず相手の目を見ることが大切だと古くからのメンバーである早坂潔さんから教えてもらった。(口などの表情だけではダメ) 恐怖の記憶や妄想で具合が悪くなった人は、恐怖で瞳孔が開き真っ黒い「猫の目」のようになっているのだ。

つまり、怒りで愚痴を振りまいている人よりも、恐怖の記憶や妄想や幻聴におびえて動けなくなっている人を見つけ出して支えるのがべてるのピアカウンセリングの核心である。

これは健常者の方にも共通のことのようなので、町の人たちのピアカウンセリングでも相手の目を見て相手が恐怖に支配されていないかを確認しつつ話を聞くことで、経験豊富なべてるのメンバーが活躍している。